

言語変化は存在しない。¹

《[Una lingua come sistema di signi]
è un *ergon*,...frutto della *enérghia* ossia
dell'attività di generazioni di parlanti,
volta per volta facenti uso dell'*ergon* a
loro giunto》 (V.Pisani, 1980)².

1. 目的と基本的概念

1.1. 本稿では、当会議³が掲げている特定の問題、例えば単純性(simplicity)、有標性(markedness)等々の問題を解決しようとするものではなく、これらの諸問題は、言語を創造性(……………: エネルゲイア)として捕らえようとするダイナミックな構想という視点から言語変化の主要な問題の枠内で、どこでまたどのようにしてこれらを扱うべきかを示そうとするものである。これらの問題の理論的側面に関しては、問題の現実的で認識論的状况を示すことによって解決されるものと確信している。そうすると、これらの問題は、単なる歴史記述についての一般的問題となるであろう。

これを目標として、言語変化に関する私の理論のエッセンスを新しいや

¹ 【訳注】原題「Linguistic change does not exist」は、*Linguistica nouva ed antica*, anno 1.51-63p. 1983年に発表された。また *Energeia und Ergon: sprachliche Variation, Sprachgeschichte, Sprachtypologie*, Narr Francke Attempo/BRO, 1988, 147-157p.に英語のまま再録されている。仏語訳として《Le changement linguistique n'existe pas》*L'Homme et son langage*, Louvain, Peeters, 2001, 413-429p.があり参照した。

² 訳：“記号の体系としての言語とは、エルゴン、つまり話すたびにエルゴンをつむぎ合わせることによって作られたエネルゲイア、すなわち話し手の各世代による活動の成果である。”

³ この論文は、元々《UCLA Conference on Causality and Linguistic change》(Los Angeles, May 1982)に提出されたものである。その内容は、われらが尊敬する学者の考え方と広範にわたり合致するものであり、長年にわたり彼に対して抱き続けてきた深い思いとその業績に対する心からの感謝の念を表明できることを嬉しく思います。

り方で提示しようと思う、この理論は既に 25 年前に論文、『*Sincronía, diacronía e historia*』でその基本的な枠組みが表明されている。しかしこの理論はつねに理解されていたとは言えない。その理由は《Hispanicum est, non legitur : スペイン語なので、読めない》⁴、また特に英語圏ではその時代精神に照らして著者の経歴が奇異なものと思われたからであろう⁵。しかし今日では、少なくとも生成文法でのある種概念とか、フンボルトについての知識がより正しく理解されるようになったお陰で、時代背景としてはずっと良くなった、それでもなお私は、まったく異端の考え方で聴衆の皆さんを驚かすようなことがないようにしたい。

1.2. うえで述べた主要な問題またはそれに関連するテーマを理解するための基礎として、幾つかのカテゴリー上の概念及び、その基本的区別をしておく必要がある。これらの区別で最初に行うべきは《自然:Nature》と《文化:Culture》、またはカント流の必然(Necessity)と自由(Freedom)との区分である。言語は文化または自由の世界、つまり芸術、科学、技術、哲学等々の人間の意識的な生産活動の世界に属しているものである。これらの活動は、基本的に《生産的》であり、また《創造的》なものでもある。創造性という語によって、我々は二重の生産性があるのではないかと理解することができる：一つは生産された《対象物》としての生産性、もう一つは

⁴ 【訳注】Graecum est, non legitur(ギリシャ語なので、読めない)の言い換え。中世書記生がラテン語の写本を写す際に、その中にギリシャ語の字句が出てくる時に頻繁に使われた字句。

⁵ 【訳注】*The Romance languages*, by Rebecca Posner, 1996, CUP の 5-6 頁で次のように書かれている：“As a functionalist, influenced by the **idealist stance** of Eugenio Coseriu, Lausberg sees language structure as in unstable equilibrium, ready to topple if undermined at its weak points and insists on social factors and speakers consciousness of their language as a community possession.” (強調は佐藤による)。コセリウは、当時アメリカの言語学界などで主流であった materialist に対して idealist(観念論者)であるとされていた。

生産することに対応する手順（これ自身もまた《生産され》得るもの）の生産品としての生産性である。それゆえ創造性とは、生産のルールを適用すると同時に、そのルールを変化する人間の活動に特有な資質である⁶。またわれわれは《因果律：causality》という特有の概念を使うが、語の厳密な意味での**因果律**(causality)と、**目的性**(finality)と**条件付け**(conditioning)を区別する必要がある。言語変化の場合には、事実、何らかの文化的対象物が生産されるものとしてアリストテレスによって区別された4つの《原因：causes》⁷、即ち**動力因**(efficient cause)、**質料因**(material cause)、**形相因**(formal cause)、**目的因**(final cause)について問うことができる。文化的対象物の場合の動力因は、創造的主体として人間、つまり一般的に言えば自由そのものである。そしてこのことこそが、動力因という概念が文化に関連する諸科学にとっては役に立たないことの原因である。言葉を換えて言えば、このような《原因》を探すことは、この分野では無意味なことである、即ち人は原因とは何であるのかを、つまり己であることを承知しているのである。ここで問題となる質料因とは、文化的対象物が作られるものとしての物質(material)であり、またこれは単に歴史的な問題、つまり起源となった物を指し示しているのである(例えば言語変化の場合には、それは基層語、上層語等々であったりするるのである)。形相因は、いったん実現されると

⁶ 訳注：人間の創造性：自然に存在している「石塊：いしくれ」の一片を削る・尖らすことによって、武器などを作るという創造性、一方「削る・尖らす」ことによって利用価値のないものを加工することができるというルールを知ることになる。このルールに「磨く」という過程を加えることによってスクレーパーなどの別の物を創造することが可能となる。

⁷ 【訳注】アリストテレスの4つの「原因」、訳語について

efficient cause:	動力因、	作用因、	第一起動力
material cause:	質料因、	物質的原因	資料、
formal cause:	形相因、	形式的な原因	本質、
final cause:	目的因、	目的的原因、	目的

それは目的性と合致することになる、そして目的性は、その文化的および機能的価値を考慮して作られた対象物そのものである。それで具体的に言えば、イリアド(*Iliad*)⁸を創った行動の目的性とは、芸術作品としての *Iliad* そのものである。またロマンス語の未来時制の目的性とは、ある特定の動詞体系内での特有の未来時制としての機能の中でのその未来時制そのものである。このような理由で、**原因**(cause) また **因果律**(causality) という概念は専ら自然界での動力因、つまり《同一の条件、または状況下で同じ効果を必然的に引き起こす原因》にのみ適用するのである。一方、創造的活動が起り、またその活動が歴史的に完遂されるべく方向づける状況の全体を**条件付け**と呼ぶことにする。つまりこれは、実践的知力の形式でもある自由が、文化的対象物を創造する際に考慮にいれる状況ということである。言語変化の場合には、それらは、所謂《言語内的 intralinguistic》であり、また《言語外的 extralinguistic》要因でもある。

1.3. 創造的活動として言語を捕らえるという観点から見た時の言語変化の現実的問題は、わたくしの考えでは、言語変化は《存在していない》との仮定より出発すれば、もっとも良く理解できるようなものである。この非存在(non-existence)という語で私が示そうとしているのは：

- a) 言語学で広範囲に受け入れられているような形では、変化は存在していない；
- b) それが実際に起きた時にもその存在を知覚できないこと(非知覚性：imperceptibility)；

「共時態、通時態、歴史」訳書の204頁参照。

⁸ 【訳注】ホメロス作として伝えられているギリシャ神話を題材とした叙事詩。日本語では「イリアス」として翻訳されている。

- c) 新たに創造された言語的現象は、その瞬間でもまた同時代でも変化として、または非変化として解釈されることがある、つまり更新および適用として解釈されるようなものである、という事実があるからである。

事実として、《言語変化》と呼ばれるものは存在しないということを示すには3つの方法がある：

第 1: 連続しているものとして捕らえられた《対象物》の変容としては存在していない、つまり外的現象における変化のプロセス(例えば $a > e$) として存在していない。⁹

第 2: 言語の話し手は、変化なしに言語的伝統(linguistic tradition)を使用し続けているとするとその言語的活動に関して確信している話し手にとっては、言語変化は存在していない。

第 3: 言語変化は、(手順の体系としての)•••••(ダイナミス)としての言語の中には存在しておらず、むしろ言語を創りだす既成の手順の生産品である •••••(エルゴン)としての言語の中においてのみ存在しているが、言語手順そのものが変化するというわけではない。

2. 言語の創造としての言語変化

2.1. 科学的研究、特に分析的および記述的探求によって、あらゆる言語は研究対象物となってしまうので、言語は何か外的なものへと具象化されるのである。このことは研究の操作上の基盤として確かに必要なものであ

⁹ 原文：as a process of change in **external phonemena**: “ 外的現象における変化のプロセスとして ”、と記されているが、仏訳では、*à la manière d'un processus de changement dans un fait extérieur à la conscience*: “ 意識にとって外的事実の中での変化のプロセスのように ”、と訳されている。

り、言語は《生産品》と同じものであると見做し、それを記述する限り、また言語は実際にどのような形で存在しているのかを忘れない限り、研究が危うくなることはない。しかし理論的問題を取り扱う時には、危険なものとなる、というのは理論的問題は、抽象化(abstraction)を基盤としてはこれを解決することはできないからである。またもし所謂《言語進展:language evolution》がそのような抽象的なものに帰されるとすると、歴史的問題を扱う時には危険なものとなる。しかしなお、これは言語変化の研究に際して行われていることである。言語が客観化された、また連続した2つの状態(例えば A : B)の違いというものは、言語変化として解釈される、つまり一つの事実が別のものになるというプロセスとして解釈される、また同時に、この事実の一部が中断されることのない持続したもの、つまりその事実そのもの(ipsity¹⁰=being itself) (a > e [a が e になる]) を表わしているとされる。これらの違いの全体が、単一現象として見なされることになり(《言語変化》または言語的《進展》としての単一現象)、その客観的《原因》を探索し、最終的に単一の一般的で継続している能動的な原因を探究することになる、というのは客観的《結果》(《変化》)は、1つの一般的現象として認識されるからである。

2.2.1. しかし言語は、物として、または自然界の有機体としては存在していない。また言語は、その話し手の意識と切り離された有機的連続性としては存在していない。言語は、話すということに関して歴史的に与えられた《技術:テクニック》であるといえる。それで言語は、話す能力の伝統として、言い換えれば、伝統的なテクニカルな知識として存在してい

¹⁰ 【訳注】 ipsity:ラテン語の ipse “それ自身” より作られた Coseriu の造語か。フランス語訳では、 ipséité と訳されている。これも訳者の造語か。

る。または、言語共同体の個々の成員に伝えられてきた《言語能力¹¹ : competence》として存在している。それで《言語変化》として解釈されているものは、言語生産品(language products)の中での変化のプロセスではなく(a が e になるということはない!)、むしろ言語的伝統の創造、話しことばで作られたものの歴史的対象化¹²(historical objectivization)、言い換えれば、創造されているものとしての言語¹³以外のなにものでもない。このように考えると、事実としては、ある伝統は死滅する(言い換えると破棄される)ことはあるが、このことは伝統が取って換わられ新しい伝統になるということの意味するものではない。

2.2.2. まず、言語において《~になる》というそれぞれの事実は、《交替 : replacement》である。このことは単に公式化についての問題ではない、というのは、言語発展の様々な相を理解するに、このことに頼っているからである。例えば、古い伝統と、発展していると見られる新しい伝統が共存していることがある¹⁴(例えば、古スペイン語では *ai- ei- e* が同じテキスト中で共存していることがある) また音声変化(ここでは、連続性が仮定さ

¹¹ 【訳注】生成文法理論で Chomsky により導入された概念で、言語形式を産出する能力(linguistic competence: 言語能力)と、実際に産出された言語形式(linguistic performance: 言語運用)とを厳密に区別しなければならないとする。

¹² 【訳注】歴史的具體化、と訳すこともできる、つまり言語は歴史的に具體化されるようなものである。

¹³ 【訳注】原文は、“*language as it is being created*”: フランス語では *la langue en train d’être créée*, “創造されている最中の言語”と訳している。

¹⁴ 【訳注】『共時態・通時態・歴史』の 127-128 頁で、コセリウは、“スペイン語の *cama* (*camba*:脚)が *cama*(寝床)と混同されるような時には、前者はその意味を考慮して *pierna* (脚)にとって替わった”としている。*camba*(脚)は *cama*(脚)へと変るが、この2つの語形が同一文書で使われている。 *tus piernas tus **cambas** tus **pies**, ...corra por tus **pies**. & por tus **camas** ayuso.* (Fuero general de Navarra, 1200 年代の文書)。この文書で、*cambas* : *camas* (脚)と *pies* : *pies* (足)という2つの語形が同じ意味で使われている。

れている)と文法的・語彙的变化(ここでは、連続性が仮定されていない)との間に違いはない、という事実をあげることができる。

さらに重要なことは、言語変化の問題は、より以前の実事との交替という(A がなぜ B に取って替わったのかというような)問題と解すべきではなく、より新しい実事が生起する問題として解すべきである。つまり、作られたものの視点からではなく、作り出すプロセスとして、《何故 A (B)?となるのか》ではなく、《何故 B?となるのか》ということである。言語の場合には、すでに所与のものとなっている伝統は、人々が歴史的産物を第1義的なものとして、また変化を第2義的なものと見なすべく作用している。創造的なものが最初に際立つことになるそれ以外の文化的分野では、新しい実事がどのようにして生起し、固定されるのかを問うべきであり、古い実事がどのようにして交替せられたかを問うべきではない。生産品の視点から問題を提起すれば、これは言語の場合にまったく不当なものとされているわけではない、つまり言語の創造性は所与の言語テクニクの中で生起する一方、他方それに替わる新しい実事はこの言語テクニクへと統合されなければならない。しかしながら、これは言語にとっても、また他の文化的なものにとっても同じように正しいものである。つまり言語での《変化》も成長も第1義的出来事であり、伝えられる生産品は第2義的なものである。言語学においては、われわれは、後ろを見るのではなく、前を見るべきである¹⁵。

2.2.3. このような視点からすると、言語変化は《変化》ではなく、創出、

¹⁵ 原文 *in linguistics too we should look forwards, not backwards.*

仏訳: *en linguistique aussi il faudrait regarder en avant et non pas en arrière.*

言語を創り出すこと¹⁶である。それによって言語が生起し、存在するようにさせる創生的現象¹⁷である。それで、《A は B と交替する》という公式は、正確に理解しなければならない。この公式は、生產品としての言語に係わるものであり、言語変化のプロセスに係わるものではない。A とか B という要素は、作られた言語の異なる時期で同価の生產品であるが、言語変化において同価のものではない。これらは同じような変動域にある、つまりこれらは伝統の集合として、言語のなかの同じ位置を占めているのである、しかし言語変化(=言語事実を創造する)という視点からすると A は、B が処置されてできて来ることになる材料¹⁸、つまり B の質料因(material cause)である。また語彙ばかりではなく、交替することなく消滅する言語的伝統というものがある、また古くからの伝統と交替しない新しい伝統というものがある。また形式的視点からすると、伝統が簡単に消失することを《ゼロとの交替》として、また取って替わるものがなく生起することを《ゼロによる交替》と考えることもできる。更に、言語《変化》(=創造)の質料 material は、別の言語より来ることもある。例えばラテン語 *comprehendere*¹⁹の意味は、ギリシャ語 ……………²⁰のそれと交替した、とすることはできない。

2.2.4. それで、言語変化は、それによって言語が消失したりまた生起する、また言語的伝統が死滅するかまたは存在するようになる、またさらに

¹⁶ 原文 construction, the making of language

¹⁷ 原文 the originary phonemena

¹⁸ 原文: A is only the material with which B is done.

¹⁹ 【訳注】 *comprehendere*: ラテン語での意味は、1.一緒につかむ、2.纏める、3.表現する、4.困む、等の意味がある。現代スペイン語では、*comprender* 理解する、包含する、等の意味がある。

²⁰ 【訳注】 …………… (*syllambano*) = arrest, catch, conceive, nab, nobble, seize

新しい伝統がわれわれが言語と呼ぶ伝統としての体系内で死滅するものと、部分的にまたは全面的にその場を占めることになるような歴史的プロセスである。無論、変化を介して異なるものとなるのは、歴史的生産品、伝統の集合物としての特有の言語そのものである。この意味で、われわれは《言語変化》、つまり言語の内での変化について云々することができる。しかし的確に言えば、客観的生産品としての言語(ergon)が変化することを意味するのではなく、言語は作られるのである。正しい展望に立てば、言語は連続的に変化するのではなく、連続的に作られ、存在するものとなるのである。

3. 言語変化についての3つの問題

3.0. 言語変化の歴史的プロセスは、この意味で単一の問題を内に含むものではなく、3つの異なる問題または3つの異なるレベルに属するようなタイプの問題を示している：

- a)言語変化の普遍的問題²¹(一体全体なぜ言語は変化するのか)。
- b)言語変化の一般的問題²²(言語は、一般的にどのようにして、またどのような言語内的・外的条件下で変化するのか)。
- c)個別的变化の歴史的問題²³、つまり特定の伝統の創造、また以前の伝統との交替。

これらの問題は、お互いに異なるものとして考えなければならない。特に最初の質問に対する答えが、第2の質問に対する回答とはならず、また

²¹ 原文：the universal problem of linguistic change

²² 原文：the general problem of linguistic change

²³ 原文：the historical problem of every individual change

その逆も成り立たない。最初の質問だけが理論的なものである。2番目のものは、一般化された言語史の経験的質問、つまり言語の歴史において多くの場合に起ることは²⁴何かという質問。第3のものが言葉の的確な意味で、それぞれの事例での歴史的問題ということになる。

3.1.1. 最初の問題【言語変化の普遍的問題】²⁵は、言語変化の本質を同定することによって、つまりそれに対応する概念の中で所与のものとなっている普遍的原理にまで遡ることによって十全に回答することができる。言語変化とは、言語的創造性の歴史的具体化である。言語は、歴史的に創造され、言語になる、なぜなら言語は、事実として創造的活動であり、また同時に他の人々に向かう創造的活動ということになる：わたしはこれを言語の何をもっても替え難い側面、つまり他者へ向けられるという性向、**他者志向性**²⁶と呼ぼうと思

う。言語変化は、(諸)原因の結果でもまた原因の産物ではなく、咄嗟の表出、つまり言語の創造性また他者志向性の初源的出現である。言語変化は、純粋な創造性として言語より発生するのである。すなわち、ある特定の言語の中での創造性、また歴史的具象化として言語変化は、ある特定の言語より発生するのである。それで普遍的レベルで言語変化そのものは、謎めいた現象である、ということはまったく事実ではない。言語変化を説明することは、このレベルで言語変化を理解することである、つまり言語変化とは何かを理解することである。このレベルで諸原因(または1つの原因)を見出そうとする人、そして何も探し出せない人は、簡単に言えば言

²⁴ 原文：……

²⁵ 【 】の部分は訳者が補った。

²⁶ 原文：otherdirectedness, alterity: “他者志向性”：これらはコセリウの造語か。フランス語訳では：altérité とされている。

語変化の本性(nature)、また言語そのものの本性を誤解しているのである、
というのは言語変化は、**存在するようになる言語**²⁷以外のなにものでもない。
それでわれわれは動力因を探求する必要はない、この動力因というものは、
創造的主体としての人間によって所与のものとなっている。また一般的な客観的目的²⁸
を探求する必要もない、これは各言語変化そのものの中で所与のものとなっている。

実際の所、われわれが確実なものとして知らないこと、また言語研究の対象としなければならないのは、
言語の歴史において最も頻繁な動機付け(motivation)は一体何であるのかということである。
しかしこの質問は、そのような言語理論によっては解答を得ることはできない。

3.1.2. このレベルでは、われわれは動機付けのタイプのみを推測することが出来るだけであり、
さらに1つの、または幾つかの動機付けを推定することが出来るかどうかについて云々することが出来るだけである。
このことを行うためには、各々の言語変化プロセスが通常どのように進んでいるのかを考えねばならず、
またある程度の区分けをしなければならない。数年前にわたしはこのようなことを考慮して区分けをした。
そしてその後、この区分けは他の人によっても同じような形でも行われた。それで今日では、
この区分けとその関連性は広く知れわたっている。しかしながら、自身の先行性を申し立てるためではなく、
もう一度この区分けについて申し述べなければならない、というのは間違った結論とか誤った仮説が言語学界に流通し、
これが全面的に排除されていないからである。それでまず、

²⁷ 原文：language coming into existence. 仏訳：la langage venant à l'existence.

²⁸ 原文：general objective finality

われわれはディスコースでの**変革**²⁹(言語運用：performance)と、言語での**変化**³⁰(言語能力：competence)との間の区別を明確にしなければならない。話し手の共同体でのプロセスとしての言語変化に関して、われわれは4つの相を区別しなければならない：

採用：adoption（個人による変革の採用）

普及：diffusion（複数の個人による採用）

選択：selection（新しい伝統と古い伝統の交互使用）

変異：mutation（2つの伝統の内の1つを破棄し、一方を保持すること、又は同じ《方言》内で、また時に異なる《方言》内で2つの伝統がある分布で確立されること。

それで、言語変化の基本的形式は、常に個々人で起る採用（複数の個人が、彼らの言語で同じ時にまた同じ変革を受け入れることもある）である。普及とは、一連の次々に起る採用である。選択とは、それ自体ディスコースでの事実である。変異とは、話し手の属する共同体での言語変化のプロセスの最終段階ということになる。

3.1.3. これらを区分することによって、言語変化のある側面を理解すること、またある問題とくに言語変化での漸進性(graduality)の問題とか規則性(regularity)の問題を正しく解決することがより容易になる。採用は、ソシュールの言うラング(langue)の中で、つまり言語テクニクの中で生起する。そしてこの理由により、言語変化は漸進的ではなく、また《非知覚

²⁹ 原文：innovation in discourse

³⁰ 原文：change in language

的》なものであり、常にその場限りのものである。こういう意味で、音声変化は、文法的变化と異なるものではなく、また音声変化は、音素変化と異なるということはない。漸進性についての幻想は、選択という相での二者択一的使用、および普及という段階より起ることである。同じように単一の形式に関連しない採用、または体系的手順というものは、規則的、言い換えれば一般的に適用可能なものである。規則性に関しては、構造的レベルでの違いがあるかもしれないし、また量的違いというものがあるかもしれない。つまりある変化は、例えば体系または規範(norms)³¹に、ある文脈またはある特定の文脈での1単位、または関連する一連の単位等々に関与するかもしれない。しかしながら質において違いはない。

それで、われわれは内延的普遍性(intensive generality)または規則性(言語テクニック、手順の体系での普遍性)と、外延的普遍性(extensive generality)または単なる一般性(話し共同体での一般性)との違いを明確にしなければならない。言語変化は、内延的普遍性という視点からすると基本的に《一般的：general》(規則的)であるが、外延的普遍性という視点からするとそうではない。後者の視点からすると、言語変化は、常に一般化でありまたは普及、つまり一連の採用である。言語学は始まって以来唱えられている

³¹【訳注】規範：コセリウは、ソシュールのラングとパロールについての諸家の説を検討した結果、この両者の間に「規範」を置く三分法を取った。彼はラングを「機能的な体系」と捉え、パロールを個人的な、具体的な実現」と考えた。その個人的な実現は、その個人特有なもの、個々の具体的な場面に特有なものを含んでいながら、その個人の属する社会の慣習としてのあるモデルに沿って行なわれるので、全く恣意的なものではなく、そこには何らかの「規範」がある。たとえば、東京語では音素 /g/ は、語中にあつては [g] と [ŋ] の異音があり、この2つの異音は個人個人の自由変異であるが、異音 [ŋ] が「規範的」と見なされている。三省堂「言語学大辞典」より。

コセリウによる規範についての論文“ Sistema, norma y habla ” in *Teoría del lenguaje y lingüística general*, Gredos, 1967, p.11-113 が“ 言語体系・言語慣用・言 ”、「コセリウ言語

外延的普遍性という幻想は、類推的変革が起り、同時期にある程度の広がりのある言語領域の様々な場所で(常に個人的に)保持されるという事実によって招来されたのである。更に選択相においては規則性は、単一の事例でまたは事例全体で実現されず停止されることもある、それでこの事によって、例えば所謂《音声法則：phonetic laws》が【適用される】³²場合に《例外：exceptions》が起るのである。その結果として、規則性を第1義的(primary)なもの、また例外を第2義的(secondary)なものに見なす伝統的原則は、完全に正当化されているのである。事実として規則性は、それによって言語事実が創造される場所の行為に属していて、この行為において、【言語を創り出すための】手順は、各事例においては単一の事実であるという単純な理由により規則的なものである。つまりこれは、未来に使うことになる【言語使用の】集合体 class にとっての規範である。例えば音声変化の場合に《音声法則》は、最終結果を表わしているものではなく、ことは共同体内でそれに対応するプロセスの出発点である。しかしながら種々の採用によって、【実際に起った】所与の変化は、様々に解釈されることになるのは事実である。このことにより、また選択の結果として起る《例外》により、最初の不規則性という錯覚が起る、とくに音声変化はある単語から別の単語へ広がると解釈されるようになる。例えば、スペイン語の話手が、もし *amao* と言い、一方で *prado* と言うとすると、この人は、*amao*, *prao* と言うと人とは異なるルールを適用している、ということになる。後者にとっては、*ao* はそれぞれ *-ado* を表わし、前者には *ao* は分詞形の *-ado* のみを表わしているということになる。しかしこのことは、変化が分詞形より他の語形に《広がる》ということの意味するものではない。

学選書2、「言語体系」の4-95頁に邦訳あり。

³² 【 】は訳者の補足した部分

わたくしは、ここで自分の例で説明すると、3つの相、つまり3つの異なる《言語》を仮定しなければならない：

- 1) *-ado*,
- 2) *-ao*(分詞で) / *ado*(他の語形で) 、【2つの語形が共存している状態】
- 3) *-ao*(すべての事例で) ³³

1)と2)の間での選択ということになると、ある頻繁に使われる分詞形が、話しことばで使われる頻度が多くなる。*-ao* という分詞形は2)でもまた3)にも含まれるという事実によって、また2)と3)の間での選択によって、*-ao* で終わる分詞形は、話しことばでは他の*-ao* 語形よりも頻繁になる。しかしこのことは、*-ado* > *-ao* という変化が分詞形より他の語形へ(またはより頻繁なものからより頻度の低い分詞形へ)《広がる》ということの意味するものではない。

3.1.4. 変革³⁴(innovation)と採用(adoption)を区別することによって、正しいやり方で変化の動機付けについての問題を提起することに役立つことにな

³³ 【訳注】この両語の変化段階を図表すると、下記のようなろう。

	動詞：『amar “愛する” の分詞形』： 発音記号		名詞：『広場』： 発音記号	
スタート	amado	[amádo]	prado	[prádo]
第1段階	amado	[amađo]	prado	[práđo]
第2段階	amao	[amáo]	prado	[práđo]
第3段階	amao	[amáo]	prao	[práo]

³⁴ 【訳注】 **innovation**: James Milroy gives ‘innovation’ a more technical sense. Milroy’s conception of linguistic change is linked with his stand on the actuation problem. He tries ‘to approach actuation by first making a distinction between speaker and system, and within this a distinction between speaker-innovation and linguistic change’. He distinguishes innovators (‘marginal’ persons with weak ties to more than one group who form a bridge between groups) from early adopters (those who are ‘relatively central to the group’); the former are associated with ‘innovations’ that become ‘change’ [in his technical sense] only when taken up by early adopters, from whom the innovation/change ‘diffuses to the group as a whole’. *A Glossary of Historical Linguistics* Campbell & Mixco, p.85.

る。一般的原則としての変革は意図的なものでありえる、つまり変革は真の意味で《因果的に:causally》条件付けられていることがある。その理由は、発話(speech)は心理-物理的に条件付けられているようなものであるからである。しかしながら因果的に条件付けられた変革といったものが、採用され拡散するチャンスはほとんどない。例えば言い間違³⁵いによってそれが一般化するようになった事例はない。これに反して、採用はテクニクとしての言語において起るところのもっぱらメンタルな行為、言い換えれば《言語知識: linguistic knowledge》というレベルでの知的行為である。それ故に採用とは、直感的なものであるかもしれないが、常に意図的なものである(採用は原理としては、通常の言語学習と違うものではない)。それゆえ採用は《原因: cause》を持つことはなく、単に目的にかかわるような(機能的、文化的、社会的または美的)動機付けがあるにすぎない。一方、あらゆる言語変化に唯一つの動機付けしかないというのは原則としてはありえない、というのは言語変化は1つの事実ということではなく、諸々の事実の全体的集合体(general class)であり、突き詰めると言語全体を包含している。しかし更に言えば、言語変化は、変革でありまた採用である。そしてある共同体の言語での言語変化とは、一連の採用である、つまり変化は繰り返され、採用されるごとに新たに実行されるのである。しかしだからといって、変革と採用の動機付けは、同じものであるべきであると仮定してはならず、そしてまた変化が拡散している間では同一の動機付けが、常にあらゆる採用に有効に働いていると仮定することはできない。無論、一般的主観的動機付け(general subjective motivation)とは、常に《他者志向性: alterity》(われわれは他の人の言語を受け継ぐ)であるが、具体

³⁵ 原文 slips of the tongue: 仏語訳では、*lapsus linguae* と訳されている。

的他者志向性には様々なタイプがある。客観的一般的動機付けは、常に目的性(finality)(最終的生産品そのもの)である、しかしながら新しく創造された事実にとって代わることになる事実と比較することによって、様々なタイプの目的性が明確なものとなる。例えば単純化³⁶(simplification)は、客観的目的性のうちのタイプの1つである。威信のあるグループの言語を採用するのは、主観的目的性、社会-文化的動機付というタイプに対応している。話し手が自己の言語を新しくするという環境に関して言えば、それは単に言語変化の条件 conditions でありまた原因 causes であるにすぎない。このことは、言語変化は起るかもしれない、ということであり、起らねばならないということではない、というのは【実際に】行われることになるもの、また環境などは、話し手によって現実に考慮されるものだからである。目的性のみが、それらを変化の現実的条件とするのである。この意味で、条件とは、二次的で他に依存する動機付けの1つの形式である。変化というものは、例えば威信には違いがあるという理由で起るのではなく、威信を獲得するために起る。またルールが複雑であるので変化が起るのではなく、むしろそのルールを単純にするために起るのである。目的性とはむしろ絶対的価値を有しているが、ただ現実的で実現された目的性としての価値を有している。これを理由として、あるタイプの目的性が、ある客観的状況下で想定することができるすべての事例で仮定することができるということはない。例えばある中立化できる対立が1要素に縮小され

³⁶ 【訳注】**Simplification**: A historical change that results in a perceived reduction of complexity in a language form or a linguistic system. For example, the Proto-Romance stressed vowel system included /i, e, ε, u, o, ɔ, a/: in Ibero-Romance, Portuguese preserves this system, but Spanish, on the other hand, has simplified the system by removing the contrast between the open or lax and the close or tense mid vowels, namely, /e, o/ and their closed analogs /e, o/, respectively. However, the removal of the open vowels introduced the complexity of a new set of diphthongs: ε > yé (as in *pie* “foot”) and ɔ > wé (as in *pueblo*)., Campbell & Mixco, op.cit. p.185, 2007.

たとすると、しばしばこの要素は、中立的要素となる、しかし常にまた必ず中立的要素となるわけではない。複雑なルールは、しばしば単純化され、また限定的に適用されるルールが一般化されることがある。しかしこのような状況下で言語変化が起る必要はなく、または変化が逆の、また期待に反した方向へと変わることもある。

3.2.1. 第2の質問【言語変化の一般的問題】については、言語変化は《どのように：how》、また言語の歴史での変化のリズムについての説明などに関連することになる。例えば、どのようなタイプの変革が最も普及するのか、またどのような状況下で言語変化が目を見張る加速度的リズムで起るのであろうか。われわれはここで、言語変化を動機づける客観的および主観的目的性のより一般的なタイプというものに関心を持ち、また話し手が考慮することになる条件のタイプなどに関心を持つことになる。別のことばで言い換えれば、自由というものが言語を作り出すほとんどのケースでどのように作用するのかを見極めることに関連させ、つまりそれに対応している【言語的】活動の規範に関心を持つのである。それでいまここで現実の問題となるのは、《言語変化の原因とは何か》ではなく、《自由というものが、言語が作られるときにまた再建されるときに通常どのように作用しているのか》である。言語変化を《説明する》とは、このレベルにおいて目的へ向かう動機付け(final motivation)として最も頻繁に起るタイプを同定することである。このようなことから、この第2の問題に関する限りにおいてわれわれが設定する規範は、経験的-歴史的な対象物であり、理論的研究の対象物ではない。例えば、単純化の規範をそのようなものとして証明するためには、単純化は頻繁に起り、またその逆の事例よりももっと頻繁に起ることを示さなければならない。一方で規範は、絶対的

なものではなく、例外を許すような本質(essence)に属している、というのは規範は、必然的な《効果：effects》を有する《原因》ではないからである。

文化科学³⁷(cultural sciences)にはそのような規範だけが設定できるだけであるという事実は、このような文化科学の弱点ではなく、逆にこの科学の強みである。というのはこのことは文化科学に特有な特徴であり、自然科学にはそれと同価のものはない。

3.2.2. 言語進展のリズムに関する限りは、促進されるリズムというものは、2つの一般的な条件に依存していると確信している：

言語的伝統の中での弱点(安定性の欠如) 例を挙げれば、言語混交または伝統文化の衰退を伴う社会-文化的革命などによる弱点、安定性の欠如

言語タイプで相反する原理の共存(歴史的に見た場合には、ある1つの言語タイプから別のタイプへの移行)：具体的な例としては、
ラテン語 ロマンズ語；古代フランス語 現代フランス語、
古代英語 英語

これらの条件がどちらも存在していない場合、またはこの条件の1つしか存在していない場合、例えば孤立していて文化的に均一な共同体で、またはほぼ均一の言語タイプから成る言語群、例えばアイスランドとかトルコ系諸語の場合に見られるように言語進展のリズムはよりゆったりとしたものである。

3.3. 第3の問題【個別的变化の歴史的問題】については、常に言語の歴

史の中での特定の変化の徹底的な【正当な】理由付け(justification)についてこだわることになる、即ち創造性(creativity)はどのように作用し、特定の時期にまた特定の言語でそれがどのように統合されることになったのかを探求する。これに対応する答によって、動機付けの集合群(classes)とかタイプを同定するための諸可能性を提示することになり、またこれによって第2番目の問題に答えることにもなる。そしてこれらの集合群やタイプによって、この第2の問題に答えるための枠組みと背景(《作業仮説》)を提示することになる。

4. 手順および生産品(作られたもの)としての言語

4.1. 言語の話し手は、言語を変化させておらず、変化を実現させているにすぎないのであると通常は思っている。話し手は、自己が創り出した新しい事実を《新しい》事実と客観的に認識することはなく、それらを単に既に《存在している》ものと考え、またはそれらを、自身の言語伝統の単なる持続また適用と見なしているのである。

4.2 この事実は、他の文化の形式(個々の創造物の創造性と独創性が顕著であるような形式)と対照させることのできる言語における伝統の重さ weight とその立場 status とにもつぱら関連している。同時に、この話し手の確信は、言語に特有の本質についての直感を暗示している。ことばを換えて言えば、言語を《作ること: making》と《作られた: made》言語との基本的な違いを³⁸暗示している。また開かれたテクニク、手続きの体系

³⁷ 【訳注】人文科学と社会科学の総称として使われる。

³⁸ 原文: the basic difference between language 《making》 and language 《made》,

としての言語と、生產品としての言語（つまり手続きの助けを借りて作り上げられたものとしての言語）との違いを暗示している。または様々な度合いの一般的なルール体系としての言語と、これらのルールを所与の資料に実際に適用されたものとしての言語との違いを暗示している。手続きの体系としての言語、またテクニカルな可能性としての言語には、実際に作られたまた実現された言語の各事例以上のものが含まれている。つまり各言語は、《未来の次元：future dimension》を有しているということである。この意味で、Whilhelm von Humbolt の仮定、言語とはまさに《そこ：there》にあるものではないという仮定を【正確に】解釈しなければならないと思われる：

《denn die Sprache kann ja nicht als ein daliegender, in seinem Ganzen übersehbarer oder nach und nach mittheilbarer Stoff, sondern muss als ein sich ewig erzeugender angesehen werden, wo die Gesetze der Erzeugung bestimmt sind, aber der Umfang und gewissermassen auch die Art des Erzeugnisses gänzlich unbestimmt bleiben》³⁹ (*Werke in fünf Bänden*, III, Stuttgart 1963, p.431).

ここで問題となるのは、所与のルールに基づき文章をいわゆる作り出すという問題ではなく、むしろ言語そのものを作り出すことに関する問題、すなわち、より一般的なルールに基づいて《ルール》を作り出すことに関する問題である。このことが意味するのは、ある視点から見た場合の作り出すための手順とは、別の視点からすると作られたものということであり、また話し手は、自己の言語でこれらの関連性について直感的知識

仏訳：différence essentielle entre 《faire du langage》 et 《langage déjà fait》.

³⁹ 【訳文】“言語は、全面的に明確でほぼ修正可能な材料としてそこに存在しているようなものではなく、絶え間なく生み出されるようなものと看做すべきであり、そこでは、それを作り出す法則は決まっているが、生產品としての言語の範囲とタイプは流動的(不確定的)なものとして留っている。”

を有しているということである。

5. 規範、体系およびタイプ・適用 application と解釈 interpretation

5.1.1. 言語変化は《非変化: non change》⁴⁰である（つまり事前に所与となっているルールとかまたは手順の単なる適用）と考えることは、言語テクニクの諸レベル間には差異があることを前提としている。

これらのレベルには：

すでに作り出された言語として受け継がれてゆくことになる実際に実現されたテクニク（言語規範: language norm）

機能的対立と手順の体系としてのテクニク(言語体系: language system)

機能と手順のタイプの体系としてのテクニク、または言語産出の原理（これら言語体系の機能と手順の基盤となっているところの原理）の体系

としてのテクニク（言語タイプ: language type）がある。

5.1.2. 言語規範での変化は、ほぼまたはある意味ですべて、言語体系の既に所与となっている機能と手順に対応している、またほとんどの言語体系での変化は、それぞれの言語タイプの既に所与となっている諸原理に対応している。それで、子供の遊びで、所謂 imparfait préludique と呼ばれるロマンス語未完了形 imperfect、例えばスペイン語で《entonces yo era el rey y tu eras la reina：それで僕は王様で君は女王様として》（ゲームでは【各人に役割が割り当てられ】このようにして遊ぶ）⁴¹は、ほとんどのロマンス

⁴⁰ 【訳注】仏訳では、《non-changement》としている。

⁴¹ 【訳注】ロールプレイングゲーム（role-playing game、略称・通称はRPG）では、参加者が各自に割り当てられたキャラクター（プレイヤーキャラクター）を引き受け、お互いに協力しあい、架空の状況下にて与えられる試練（冒険、難題、探索、戦闘など）

諸語では比較的近年に起ったもののように思われる。この意味で、これは、言語規範での《変化》を指し示している、しかし《非実存：non-actuality》的な時制として既に所与のものもとなっているロマンス語の未完了形の機能的範囲に対応している。ソシュールがフランス語で《可能な》形式として引用している *firmamental*(天空の)という形式のような新しい派生語は⁴²、新しい出来事、言語規範での変化であり、言語体系の適用(機能化)ということである。同じく言語タイプは、言語体系の拡張、または変化に適用されることになる。それで、ロマンス諸語のタイプ(現代フランス語を除いて)は、一般的原理によって統制されている⁴³：

内的(非関連的)機能に対する内的(系列的)限定⁴⁴

外的(関連的)機能に対する外的(連辞的)限定、つまり迂言的表現⁴⁵

そしてこの原理は、俗ラテン語から始まりこれらロマンス諸語に適用されている。非関連的機能、例えば【文法的】数、ジェンダーや基本的動詞の時制などでは、系列的表現 *paradigmatic expression* は、保持され、また組織的に回復され、【適用範囲が】拡大された、一方関連的機能 *relational functions* など、例えば格、比較では、系列的表現は結果として破棄された

を乗り越えて目的の達成を目指すゲームの一種。または、このような遊びを行うために作られたルール。元々は戦争シミュレーションゲームから派生したもので、アメリカで考案された、本来はテーブルゲームである。

⁴² 【訳注】*Curso de linguística general*, Saussure, traducido por Amado Alonso, 1973, p.264
firmament 天空 (noun) > firmamental 天空の(adj.)

⁴³ 【訳注】Rebecca Posner, op.cit. 37p.は、次のように述べる：“Coseriu’s ‘Romance type’ must, however, exclude modern French, which has changed since the Middle Ages into a more **analytic** language, relying, for instance, on subject pronouns to mark verb person, and losing the productive nominal diminutive formation that persist in other Romance language. Coseriu places Rumanian too outside the Romance inner circle, at the other extreme from French. I prefer to identify Romanceness in terms of an archetype, not in the sense of the most ‘neutral’, but in that of the most ‘central’ of the languages – the model to which all the others may be most easily compared.”

⁴⁴ 原文：《internal (paradigmatic) determinations for internal (non-relational) function.

⁴⁵ 原文：external (syntagmatic) determinations – this is, 《periphrastic》 expressions – for external

か縮小された、そしてこれは部分的にわれわれの時代まで持続している(例とすれば人称代名詞の格形式がある)。ロマンス諸語、特にポルトガル語からルーマニア語までの南部地域で使われている言語では、お互いに著しく似ている、この類似性はこれらの諸言語が共通の資源的基盤を有していること、相互の影響によることばかりではなく、特に言語レベルで同じ言語テクニクによって歴史的に作られたということを主要な理由としている。《傾向:tendency》(または《潮流:trend》)という用語は、このことと関連して使われている。しかしながら《傾向:tendency》(または《潮流:trend》)そのものは、形式的概念である。具体的な用語で【言い換えれば】、この問題は、【言語】生産品に対する同一原理の進展的適用の問題である。

5.1.3. これは、次のことを指し示している。規範の発展(変化)とその言語体系への単なる適用、言語体系の発展とその言語タイプへの単なる適用である。このことによる重要な方法論的帰結としては、共時態(機能)と通時態(変化)との間の違い、またはルール適用とルール変化との間の違いというものは、【そのようなものとしての言語】発展での現実的区別としては放棄せねばならない、ということである。現実に存在しているのは、体系の共時態 - 機能 内での規範の通時態、および言語タイプの共時態内での体系の通時態である。

5.2. しかしながら手順と原理の適用は、これら手順と原理の直感的に作られた再解釈というものを前提としている。しかし解釈とは《再解釈》でもありうる、また《客観的》(より一般的)解釈より分化することもある。それで、フランス語のある話し手は、*liaison* の/z/を複数形の接頭辞として

解釈していた。それで *zieux*⁴⁶, *quatre-z-officiers* という形式があり、また標準フランス語で *liaison* 付きの *Vous êtes Italien* とするものがあり、また *liaison* なしで *vous êtes Italiens* とするものもある。ルーマニア語で *-i* と *-e* で終わる命令形は自動詞 / 他動詞という対立に対応するものであると解釈されていた。それで偶然ではあるが、これが多くの動詞で実際に使われた（例えば、*dormi* 《眠れ》、*fugi* 《走れ》などは *scoate* 《持ち出せ》、*bate* 《咬め》と対立しているのを比較せよ）。そして現代では、他動詞と自動詞として使われる第3と第4動詞活用の多くは、2つの命令形形式があることになる（*plîngi* 《泣け》、しかし *plîngel-l* 《彼を泣かせよ》）。客観的には、このケースの場合には《変化》がある、ということができる。しかしながら、話し手は、再解釈に際してあたかも言語を変化させていないかのように振舞うのである、というのは話し手の解釈は正確である、つまりそれに対応する手順は言語の中で既に《与えられて》いるものと確信しているからである。

5.3. より徹底的な研究を行えば、言語規範はもっぱら体系が適用されることによって変化し、これに対して体系は言語タイプの適用によって、また一部は再解釈によって変化し、言語タイプはほぼ再解釈によって変化している、ということがわかると著者は考えている。

6. 結論

⁴⁶【訳注】：例えば、*le plaisir des vieux* “老人達の楽しみ” という表現が、*le plaisir des zieux* と書かれることがある。des vieux であるべきであるが、des zieux と書かれることがある。

言語をエネルギー …… として見れば、言語変化は第一義的言語現象である、つまりこれは《変化》ではなく、むしろ言語の歴史的創生物 (historical construction) である。この創生物は、おもに言語そのものに所与のものとなっている生産品の手順の適用によって生じるのである。この視点よりすると、ここで論じられている概念は異なる概念的レベルに属し、また言語変化の問題の別の部分に属している。**目的性** finality と**因果律** causality という概念は、言語変化の理論に属しているものである。用語の正確な意味での**因果律**は、言語に関してはまがい物の概念である、というのは言語変化にはどのような《原因》といったものはない。この概念は、**動機付け**という概念と取り替えるべきである。一方で**目的性**は、正しい場所にすえられているといえる、というのは言語変化の動機付けは、目的に係わることであるからである。それで、客観的目的性と主観的目的性の区別をすべきである。**単純性** simplicity、**経済性**⁴⁷economy、**有標性**⁴⁸markedness という概念は、客観的目的性の形式に係わっているものであり、また経験

⁴⁷ 【訳注】 **economy**: A concept akin to the philosophical and scientific principle embodied in Okham's Razor, which states that a hypothesis that employs fewer entities and simpler logic is superior to one that does not. The criterion of economy in reconstruction holds that when multiple alternatives are available the one that requires the least number of reconstructed elements with the fewest independent changes is most likely to be correct. For example, in phonological reconstruction economy is achieved in a proto-system with smaller numbers of phonemes, involving the fewest changes to account for the reflexes found in the cognates of daughter languages. Campbell & Mixco, op.cit. p.51-52.

⁴⁸ 【訳注】 **markedness**: The theory of markedness originated with the *Prague school* in the early twentieth century and was further refined and promoted by *generative* linguists. Markedness is based on the observation that some linguistic elements and structures in languages are more natural, more expected, more frequent across languages, easier for children to acquire in child language acquisition, last lost in language pathologies and more common as the outcome of linguistic changes – these are called *unmarked*. On the other hand, other elements and structures are less natural, unexpected, less frequent across languages, more difficult to acquire in child language acquisition, lost earlier in language pathologies and less likely as the outcome of linguistic changes – these are called *marked*. Historical linguistics, through the study of language change, both contributes to the understanding of markedness and often utilizes it to determine the best hypotheses of change and reconstruction. Campbell & Mixco, op.cit. p.115-116.

的-歴史的探求に属している。これらが話し手の活動に関連している限りは、これらの用語は、この活動の規範(norms)を指し示している。これらの規範は、言語変化はどのようにして起るのかを語っているのであり、何故起るのかを語るものではない。しかし絶対的に、必然的にどのように起るのかをしめすものではなく、多くの場合(.....)どのように起るのかを示すだけである。これらの規範とは、まさに言語変化の探求の目的となるものである。言語学的問題は、何故 why ということではなく、何の目的 what end で、どのように how ということになる。言語変化の客観的条件(例えば、《体系の圧力》)は、経験的-歴史的探求に属している。しかしながら、これらの条件は《原因》、また独立した《動機付け》と見なすべきではない。これらは、2 次的動機付けに属すものである。無論、規範も条件も《原因》と呼ぶことが出来るかもしれないが、これらは、《原因》という用語の別の意味である。厳密に言って言語内的なものであるかぎり、言い換えれば言語の内的構造に関連しているかぎりでは、傾向(tendencies)は、言語タイプの歴史的機能の発現である。ということは、適用(application)と再解釈⁴⁹(reinterpretation)という概念を、【われわれが言語に関することについて考察するときの】必須の概念群に加えなければならない。この2つの概念は、すでに受け入れられた革新(innovations)の全くあたりまえの形式的なものであり、それゆえ、言語変化にとっての全くあたりまえの概念を指し示しているにすぎない。

⁴⁹【訳注】reinterpretation: While reanalysis typically has to do with the reassignment of syntactic or morphemic boundaries (for example, Arabic *naranġ* > English *a norange* > *an orange*, with a reanalysis of the *n* as part of the article rather than belonging directly to the article), reinterpretation involves a change in syntactic and semantic category; for example, in *that was fun* > *that was a fun game*, the noun *fun* is reinterpreted as the adjective *fun*. Campbell & Mixco, op.cit. p.169.